



「忠臣蔵三百年」48番目の義士 萱野三平重實⑦

もう一人の赤穂浪士

前回は、赤穂浪士四十七士の一人である近松勘六の妻が、討ち入り前に病気のため萱野村へ帰されたことを紹介しましたが、今月はこのことをさらに掘り下げて考えてみたいと思います。

滋賀県野洲郡中主町には、勘六の生家が、今も当時の状態で伝え残されています。この家は、勘六の祖父で名医として名高く、赤穂藩とも深くかかわりのある兵学者「山鹿素行」とも交流のあった近松伊看が建てたもので、かや葺き屋根のこの建物は、湖東地方で最も古い民家として知られています。

ここには、現在、勘六の弟の子孫である近松重義氏が住んでおられ、勘六が書いた手紙などの古文書を多量に所有されています。



ます。ところが、この古文書の存在がごく最近まで研究者に知られていなかったため、その内容の多くが不明の状況ですが、一部解読された文書の中に「病弱の妻を摂津国萱野村へ帰した」と記されていました。

ところで、萱野村の女性が、どんな縁で赤穂藩士近松勘六の妻となったのでしょうか。近松家に伝えられる家系図によると、勘六の妻は赤穂藩士である藤井彦四郎の娘で、その縁で勘六に嫁いだことが分かりました。

藤井彦四郎は、赤穂藩の持筒頭（鉄砲隊の指揮者）として二百五十石の高禄の身分で、赤穂城明け渡しの際に本丸門の責任者としての役目を果たした後、討ち入りの同士には加わらず赤穂の地を去ったため、その後の消息が分からなくなっていました。以上のことから、赤穂

を去った藤井彦四郎が萱野村に帰郷し、彦四郎の娘で勘六に嫁いでいた女性も父のいる萱野村に帰ってきたものと推測されま

す。
ところが、このころ萱野村には萱野三平も帰郷していましたので、赤穂藩の重職にありながら仇討ちの仲間に加わらなかった彦四郎と、中小姓という軽い身分であったが仇討ちの急進派であった三平が、同じ村に居住するという結果になってしまいました。

のちに、三平の父重利が「三平を赤穂藩に推挙した旗本大嶋家に迷惑がかかるため仇討ちに反対した」と伝えられています。同じ村にいた彦四郎が仇討ちに加わらなかった点も、重利の反対の理由の一つになった可能性を考えなくてはならないでしょう。

およそ300年前の元禄時代の終わりに箕面には二人の旧赤穂藩士がいたと考えられますが、平成の今日に至って、萱野三平という名の一人の赤穂藩士は歴史上の英雄としてたたえられ、一方で、藤井彦四郎というもう一人の赤穂藩士の存在は完全に忘れ去られていました。しかし、三平も彦四郎も、また彦四郎の娘も、「赤穂事件」に巻き込まれた共通の人物であったといえます。